

武蔵国新羅郡誕生の歴史的背景について

- 特別展「新羅郡の時代を探る」シンポジウム -

講演者：宮瀧 交二



写真1 シンポジウムの様子

(2018年11月24日 和光市民文化センターサンアゼリア小ホール)

はじめに₂

今、ご紹介いただきました、大東文化大学の宮瀧です。平成元年に埼玉県で学芸員試験に合格し、埼玉県での初めての仕事が、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の仕事でした。和光市の東京外環自動車道の発掘調査に派遣され、柿ノ木坂遺跡を調査しました。サミットでお弁当を買い、白子のレインボーモータースクールで免許を取ったりして、青春の1ページは和光市から始まっております。当時一緒に発掘調査をした和光市の生涯学習課の鈴木課長補佐とはそれ以来のお付き合いで、今日の午後・明日発表されるみなさんも長くこの地域の郷土史研究をさせていただいた仲間です。そのようなみなさんと一緒にこの2日間、新羅郡の謎を解明でき

ることをとても嬉しく思っています。

私の顔をどこかで見たことあるなという方もおられるかもしれませんが、今年の7月1日、NHKのプラタモリという番組で大宮にタモリさんと近江さんを案内させていただきました。

16年間埼玉県の学芸員をし、大宮にある埼玉県立歴史と民俗博物館にも勤務しておりました。その後、ご縁があり14年前から大東文化大学で歴史を教えております。大東文化大学は大正12年の関東大震災の年に創立し、今年で96周年を迎えました。卒業生には桂米朝さんがおりまして、米朝会談と言いますと世間ではトランプ大統領と金委員長となりますが、本学では桂米朝さんの怪談話となります(笑)。また、今年、文学部に歴史学科ができました。埼玉県の大学で唯一の歴史学科となっております。

して、埼玉県内で歴史が好きな高校生には大東文化大学の扉をたたいていただけたらと思います。

本日の基調講演は、新羅郡の謎に迫っていきたいと思っておりますが、その前段として、文献資料を中心に基本的なところをお話をさせていただこうと思っております。

お手元の資料集に詳しく原稿を書いておりますので、お宅へ帰っても思い出していただけたらと思います。

現在の和光市・朝霞市・志木市・新座市の四市は、おおよそ1300年近く前には武蔵国の「新羅郡」という場所でありました。ご存知のように、高句麗・新羅ともに古代の朝鮮半島に存在した大国でした。一昨年の2016年は、高麗郡建郡1300年の年でありました。地元日高市、高麗浪漫学会をはじめ各方面で高麗郡の研究が深まった年でもありました。私も一部のイベントに参加させていただきました。

さて、当時の律令国家がまとめた正式な歴史書「六国史」に主な奈良時代の出来事が書かれています。日本書紀に次ぐ2番目の歴史書です。高句麗・新羅とともに古代朝鮮半島に存在した大国でしたが、『続日本紀』霊龜2(716)年5月辛卯条には、

駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七国の高麗人千七百九十九人を以て、武蔵国に遷して始めて高麗郡を置く。

と記されています。奈良時代の国家行政は、中国のシステムに緻密に倣った文書行政を徹底しておりまして、高麗人1799人というリアルな数字が残っております。古墳時代から朝鮮半島の人々が移住してきておりましたが、このような人たちを集めて、高麗郡は、武蔵国の入間郡の一角を割いて、今の日高市・飯能市・鶴ヶ島市あたりに建郡されました。駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野とほぼ関東一帯の高句麗の渡来人が武蔵国の高麗郡に集まってきました。

ここでお気づきかもしれませんが、ここに挙げられた地域に、「下野」があっても「上野」がありません。上野には、高麗郡という名前

はありませんが、渡来人がいっぱいまして、「多胡郡」ができておりました。上野国の渡来人は、埼玉の地にはやって来ていないようです。多胡郡が、高麗や新羅等の朝鮮半島の名前を付けていない点は、注目するところです。「たご」というのは静岡県田子の浦や千葉県多古町など、その地名は関東各地にありまして、これも多くは渡来人が入植した名残りであるとも言われています。

『続日本紀』に載っているように高麗郡は建郡されました。郡を作ることを古代史研究者は「建郡」と言います。当時、郡の名前は漢字2文字が原則のため、高句麗を高麗と表記したと推測されます。高麗神社の入り口の扁額には高麗の高と麗の間に小さく「句」の文字が書かれています。高麗郡は、一昨年が建郡してから、ちょうど1300年目にあたりました。日高市をはじめとする地元の自治体や、ゆかりの高麗神社等で、様々な記念行事等が催されたことは、記憶に新しいところです。

また、同じく『続日本紀』天平寶字2(758)年8月癸亥条には、

歸化の新羅僧卅二人・尼二人・男十九人・女廿一人を武蔵国の閑地に移す。是に於て、始めて新羅郡を置く。

とあり、高麗郡に約40年遅れて、新羅郡が誕生しました。ここで注目したいのが、74人という少ない人数で始まったこと。また、一般の農民ではなく、お坊さんと尼さんの入植が多いことは、渡来人の入植に深く関わっているのではないかということです。このことは、國學院大學の名誉教授鈴木靖民先生が最初に注目した点です。

大東文化大学の諸橋轍次先生と学生たちが命がけで作った『大漢和辞典』を見ますと武蔵国の「閑地」、すなわち原っぱに新羅郡は建郡されたようです。高麗郡は、入間郡を分割してできたとされていますが、新羅郡は豊島郡の北のはずれを分割して新羅郡になっているのではないかと思います。後ほど、詳しくお話しします。

というように武蔵国に、今度は新羅の国名に

関する新羅郡も建郡されました。今年、新羅郡が建郡されてから、1260年目にあたります。

このような事態は、現在で言えば、埼玉県内に外国の国名に関した市町村を設置したに等しいもので、埼玉県に北朝鮮市や韓国市ができたと同じような位置づけになってきます。当時であっても、極めて異例のことであったと思われます。ここでは、この武蔵国を舞台とした高麗郡と新羅郡の建郡の背景を、当時の東アジア史の中で考えてみたいと思います。

1 7世紀の朝鮮半島情勢と渡来人

7世紀の朝鮮半島情勢を確認しておきたいと思います。高校時代に皆さんも一度は見たことがあるかと思いますが、高句麗・新羅・百済の三国が朝鮮半島をそれぞれ分割して国を形成していた時代です。一番北、今の北朝鮮の方にありましたのが高句麗。朝鮮半島の半ばの東側にありましたのが後に朝鮮半島全体を統一する新羅。そして、西側にありましたのが当時の日本倭国と密接な関係にありました百済。538年に仏教が日本に正式に公伝し、これを伝えてくれたのも百済の王「聖明王」でした。そして、660年には、新羅と唐の連合軍が百済を滅ぼします。

倭国は、復興を図ろうとしていた旧百済軍を支援するために出兵するわけですが、663年、百済・倭の連合軍は錦江の河口付近の白村江「はくそんこう」あるいは「はくすきのえ」という言い方で習った方も大勢おられることを思いますけども、ここで唐と新羅の連合軍と戦い、百済の連合軍は大敗を喫します。

この時、百済の官人・役人の中には、敗戦したことによって倭国に政治的亡命を図った者がいます。また、官人や役人たちだけではなく、難民となって動乱を避けて倭国に移住したものもみられています。一方、連合軍を破った新羅は勢いづき、668年百済を滅ぼしてから8年後、再び唐の力を借りて、今度は高句麗を滅亡させました。

こうした、朝鮮半島の相次ぐ動乱によって、数多くの百済・高句麗の人々、そして、国内的

な政治的な事情もあったのでしょう、勝者であった新羅からも祖国を離れる決意をした人々が、数多くこの倭国に移住してきたと見られています。

ところで、かつてはこうして倭国に移り住んだ人々を「帰化人」とよく呼んでいました。今でも小錦さんとか、サッカーのラモスさんとか帰化という言葉はよく耳にする言葉ですけども、これは自ら進んで、自らの意思で他国の国籍を取ることです。先ほど申しましたように、この朝鮮半島の古代の動乱の時代には、王族や官人のように進んで倭国にやってきた人もいれば、難民として海の向こうの倭国にやってきた人、あるいは、日本軍が連れてきた人とか、いろいろな理由で朝鮮半島の人が、倭国にやってきました。このことから、今日では「帰化」を求めた人々を含め、海を越えて倭に渡って来た人々という意味で、「渡来人」と総称することが一般的になっています。



写真2 レプリカの土器を用いた生け花
(シンポジウム会場にて展示したもの)

II 文献史料にみる古代東国の渡来人

さて、次は文献資料から古代東国の渡来人をみていきたいと思えます。倭国にやって来た渡来人たちは、最初は朝鮮半島に近い九州や山陰地方、近畿地方をはじめとする西日本各地に上陸し住み着きます。ところが、すでに7世紀代には、西日本各地のみならず関東地方にも移り住んでいたことが、史料（文献史料）からも明らかです。今回のテーマとなる武蔵国に関わるものとしては、『日本書紀』の7世紀後半にあたるところに集中して、以下のような百濟・新羅からの渡来人に関する記述を見出すことが出来ます。

- ①天武天皇 13 (648) 年 5 月 ^{かつし}甲子条
化来る百濟の僧尼及び俗、男女併せて二十三人、皆武蔵国に安置む。
- ②持統天皇元 (687) 年 4 月 ^{きぼう}癸卯条
筑紫大宰、投化ける新羅の僧尼及び百姓の男女二十二人を献る。武蔵国に居らしむ。田賦ひ稟受ひて、生業を安からしむ。
- ③持統天皇 4 (690) 年 2 月 ^{じんしん}壬申条
化歸ける新羅の ^{かんなまのこま}韓奈末許満等十二人を以て、武蔵国に居らしむ。

日本の古代国家は、天武天皇・持統天皇の頃に国家としての体を成したというのが定説になっています。「倭国」から「日本」という国名に替わったことや「大王」から「天皇」という称号に替わったのも、天武・持統朝と言われています。7世紀の中葉から後葉に日本の古代国家の礎が築かれていったという研究成果があがっています。

まず、①②ですが、後述のように「^{そうに}僧尼」の存在が注目されます。また②では、「田」と「^{かて}稟」の語があるように、新羅からの渡来人を武蔵国に住ませるに際して、土地と食糧を与えて優遇していたことが注目されます。また、③からは、「^{かんなまのこま}韓奈末許満」という新羅からやって来た人名が伺われ、興味深いところです。『日本書紀』には、武蔵国関係の記録だけでなく全国の記録がありますが、その中にここにピックアップしたように、7世紀の後半から新羅・百

濟の渡来人が武蔵国に移り住んでいたことが記されていました。以上から、渡来人を国家的な政策として武蔵国に移り住まわせていたことがわかります。

III 考古資料にみる東国の渡来人

ところで、埼玉県には現在5つの国宝があります。①稲荷山古墳群から出ました115文字を刻んだ鉄剣、②東松山市の東側の都幾川町慈光寺の法華経で、平家納経と並んで大変美しい装飾経です。現在三分割し、慈光寺、東京国立博物館、埼玉県立歴史と民俗の博物館にそれぞれ保管してあります。次に、県立博物館で持っております③ ^{おさふね}備前長船の太刀、④同短刀が国宝となっております。なぜ岡山で作った刀が埼玉県の国宝となっているかと申しますと、注文した秩父の武士が、刀を作るなら有名な備前の長船に作らせようとしたためです。特に短刀が有名で、一時期、秩父神社に奉納されていました。その後、上杉謙信が守り刀として秩父神社から持ち出して使っていたとも言われています。長らく埼玉県の国宝は4つでしたが、数年前、熊谷市と合併した旧妻沼町の⑤聖天山「歓喜院聖天堂」が加わりました。

文献資料とは別に、考古資料からも当時の様子を伺うことが出来ます。今後、国宝になる予備軍として、県内には数多くの重要文化財がございます。

そのひとつが、さきたま古墳群の埼玉県行田市の酒巻14号墳（6世紀末）から出土した埴輪です。この埴輪、少し風貌が変わっておりまして、頭に三角のものをつけており、これは冠を表現しております。また、^{つつみそで}筒袖と言って袖が長く作られた衣装を着ております。これらは、他に例を見ない高句麗の古墳（北朝鮮・舞踊塚〔4世紀後半〕ほか）の壁画に見られるのと同じ筒袖の衣装を着た人物の埴輪で、この埴輪は、渡来人の姿を映しているのではないかとされています。

また、同古墳から高句麗の古墳（北朝鮮・^{そうもろづか}双楹塚）〔5世紀〕ほか）の壁画に見られる、^{くら}鞍に ^{はたざお}旗竿を装着した重装騎兵が用いる重装の馬

を表現した埴輪が出土しており、これは、日本で数百体出土している馬の埴輪の中で唯一です。

以上から、酒巻14号墳の被葬者と渡来人との間には、密接な関係が想定されています。6世紀頃から多くの渡来人が埼玉の北武蔵地域に来ていたことはどうやら間違いのないことのようにです。酒巻14号墳の被葬者が渡来人なのか、あるいは被葬者が在来の地元の豪族で、関係者に高句麗系の渡来人がいたのか、今後の研究の課題です。これらの埴輪は行田市にある行田市郷土博物館に展示してありますので、見ていただけたらと思います。

IV 摂津国百濟郡の建郡

さて、高麗郡・新羅郡ばかりのお話を今までしてきましたけれども、実は郡の名前になっているもう一つの国があります。それは、先ほど白村江の戦いで滅亡した百濟です。『日本書紀』の天智天皇年3(664)年3月、白村江の戦いの翌年の記録ですけれども、3月条には、

百濟王善光王等を以て、難波に居らしむ。

とあり、倭は亡命してきた百濟王族・貴族層を大阪の難波に配置し、移り住んでいるという記録です。664年に敗れた百濟の王族が日本に亡命してきていたわけですが、彼らに移り住んでいた難波は摂津国百濟評という名前で建評します。701年には日本国内で最初の中国に倣った法律である大宝律令が施行され、それ以降は郡という単位が正式に使われ始めます。

ですから、埼玉には高麗郡・新羅郡という2つの外国の国名に関連した郡がありましたが、朝鮮半島の三国のうちもう一つ残っている百濟も大阪に摂津国百濟郡としてあったことが、『日本書紀』の記録からわかるわけです。百濟郡は天皇や朝廷に近い場所に作られている、一方、我が高麗郡と新羅郡が、京都からほど遠いこの僻地に置かれていることは、後ほどお話しますが、それは意味があると考えています。

天皇が暮らす平城京、大和国には特別行政区的なエリアが形成されます。大和・山城・河内・和泉・摂津という5つの国は「五畿」とされ、

天皇を取り巻く重要なエリアとして位置付けられていました。重要なエリアである五畿であるうちの一つ「摂津国」に百濟郡ができていたことは注目する点です。これはなぜかと言いますと、倭国が旧同盟国であった百濟を滅亡後も重視して支援していたことの象徴であり、古代史研究者荒井秀規氏の言葉を借りれば、「ヤマト王権内に百濟王権を創出した。」とみていいでしょう。朝鮮半島での国は滅んでしまったけども、実際の王族貴族を日本に呼んで摂津国に百濟郡を置くことによって、ヤマト王権の中に百濟王権をもう一度再現しているという評価も生まれています。

V 建郡は誰の意志で行われるのか

それでは、いったい建郡は誰の意思で行われているかをお話したいと思います。結論から言いますと地元の今の和光・志木・朝霞・新座の人たちが郡を作りたいなどと言って作ることが出来るものではないということです。これはあくまでも中央が政策的に地方の意思をあまり考えなくても自由にできる重要決定事項になっていたということです。大宝律令や後の養老律令が奈良時代の政治社会を規定するわけですが、「律」は今で言う刑法、「令」は民法で日常の暮らしの事が決められています。養老律令の中の公式令で、太政官が天皇の決裁を仰ぐ場合に用いる公文書の様式として、論奏式、奏事式、びんそう便奏式の三種を定めている中で、公式令論奏式条に国や郡の設置や撤廃に関する「廢置国郡」の規定があります。早川庄八氏によれば、「論奏」は、太政官が独自に発議した案件を天皇に奏上して裁可を仰ぐ案件であって（早川庄八「太政官処分について」『日本古代の社会と経済上巻』吉川弘文館、1976年）、諸司官人から太政官に上申された案件を太政官が審議し更に天皇に奏上して裁可を仰ぐ「奏事」や、日常的な政務について太政官の審議を省いて少納言が天皇に奏上して裁可を仰ぐ「便奏」とは異なるものです。

つまり、「廢置国郡」（国や郡の設置や撤廃）は、まさに国家の大事を時の政策集団である太

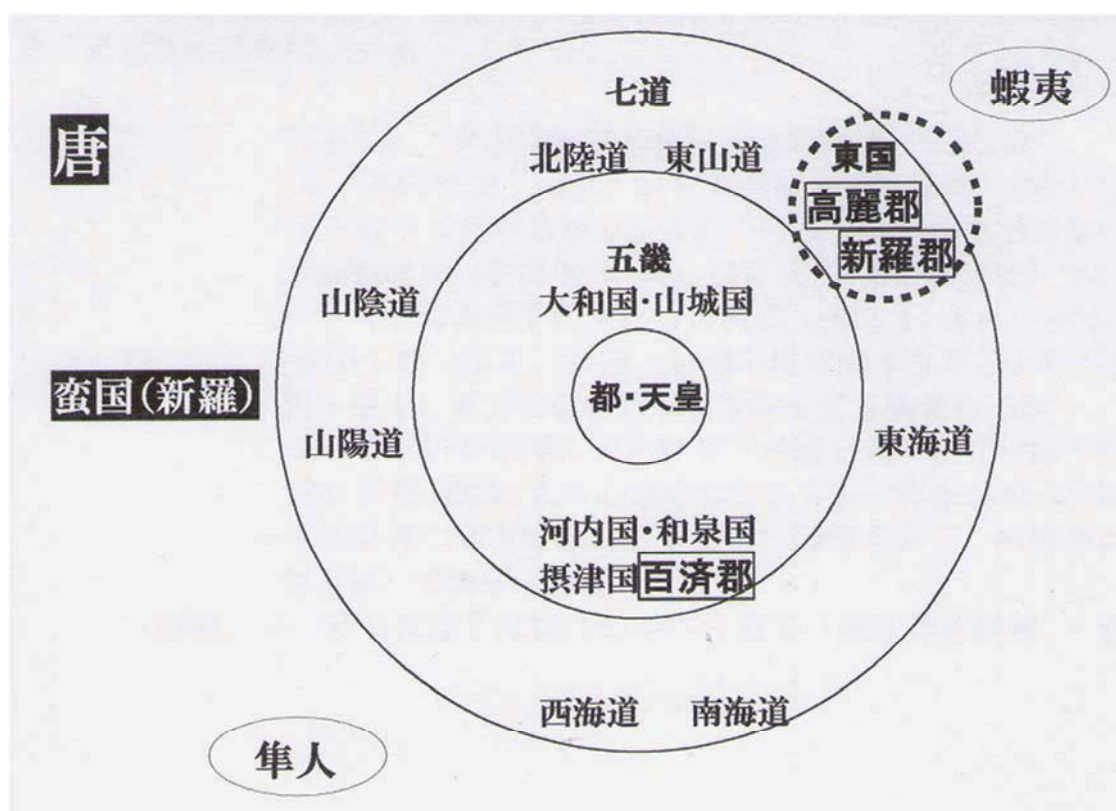


図1 日本型中華思想の模式図

政官が協議し発議する「論奏」の中に位置付けられていたのです。つまり、高麗郡や新羅郡の建郡は、地元の武蔵国等から太政官に上申された案件（地域からの要請された案件）ではなく、太政官が独自に発議・協議する案件だったのです。まさに国策であり、その背景には国家として様々なねらいがあったと考えられます。

VI 武蔵国高麗郡建郡の歴史的背景

当該期の東アジア世界における国際関係の中での検討と資料集に書きましたが、日本の古代国家は遣隋使・遣唐使など隋の国以来、中国の先進的な文化を日本に取り入れて国作りを進めてきました。ですから、日本が唐を凌いでアジアの盟主になるという野望は毛頭ないわけです。そういう野望を最初に持った人は、後の秀吉でしょう。少なくとも7～8世紀の日本は、アジアのナンバーワンは狙っていません。もう叶わないことはわかっているわけです。東アジア世界において唐に次ぐナンバー2の地位を

確保するために、唐に学んだ「日本型の中華思想」を構想し、実践していました。今、中華料理という言葉が残ってますけど、唐は自分たちが世界の中心、真ん中にある「華」であり、その唐を取り巻く同心円上をに外に行くにしたがって、自分たちの支配が十分に及ばないエリアが多くなっていくという考え方です。同じように日本も日本型の中華思想を持っていました。唐の皇帝に代わる真ん中の位置には天皇がおり、天皇が住んでいる都、藤原京や平城京もあります。その外側には、近畿地方の5つの重要な国、すなわち都のあります大和国と山城国。そして、瀬戸内海から朝鮮半島に繋がっていく水路・海路を有していた河内・和泉・摂津。この5つの国が外側の同心円「五畿」というエリアになっていきます。その外側は「七道」と呼ばれる東海道・東山道・北陸道・南海道・西海道・山陰道・山陽道です。

このように古代の日本は、畿内と七道に分けられ、近畿地方の大和・山城・河内・和泉・摂

津この5つの国を五畿として、中央の特別行政区域にしています。それ以外の全国が7つのエリア（七道）に分けられていました。緊急時、地方の役人は重要な文書を持って馬に乗り、駅家というステーションで馬を乗り換えて、中央へ情報を伝達して行ったのです。

日本の古代国家は、朝鮮半島を統一した新羅を「野蛮国」と位置付けていました。新羅国に対しては付度していないわけです。高句麗・百済を滅ぼし朝鮮半島を統一した強国だと認識しています。例えば、九州にやってくる新羅の遣いを「蛮客」と表現したりして、日本はアジアのナンバー2を狙っているわけですので、ライバルの新羅国を、日本よりいろいろな意味で低い国に位置づけたいと思っていました。また、8世紀の初頭頃、未だ律令制度が進んでいなかった東北地方の人々を「蝦夷」と呼び、また、関東地方までが日本とされ、その先は「蝦夷国」と言われていました。戸籍に登録されて税を払っていたかどうかで日本人かどうか区別されていたのです。そこで東北地方の人たちは、近畿地方の天皇が支配する国の一員にはならないぞと抵抗し、戸籍への登録を拒んでいたのです。つまり、8世紀初頭は、東北地方はまだ日本ではなかったのです。それから、南の方も熊本・鹿児島の方は「熊襲・隼人」と言われていました。「夷狄」という意味です。蝦夷も夷狄も野蛮な国の人々という蔑称になります。

VII 武蔵国新羅郡建郡の歴史的背景

ここに掲げた「日本型中華思想」の図は、研究者の方が長年議論してきて、だいたいほぼ一致している模式図だと思います。この蝦夷の国と接する、当時の日本の東の最果ての地に実はこの関東地方があったわけです。今でこそ、関東地方は首都東京があって、日本の中枢みたいなイメージがありますが、当時は近畿地方が中枢で、関東地方は蝦夷の国に接する日本の東の最果ての地だったのです。その中に、高麗郡・新羅郡が置かれているというのは、これほど意味深長なことはないかと思えます。もし高麗郡や新羅郡が近畿地方にあったら、全然意味合い

が変わってくるんですが、日本の同盟国であった百済だけは中央の近畿に置かれ、高句麗・新羅の国の渡来人たちが集まってつくった高麗郡・新羅郡は関東に置かれている。これは、非常にシンボリックな当時の政府の政策だったと、私は考えています。

つまり、当時の東アジア世界にあって大国であった唐に次ぐアジアナンバー2の地位を目指していた日本が、この日本型の中華思想に立って、朝鮮半島の今は亡き百済・高句麗に加えて、新羅という三国について「これらの国々は日本の国王である天皇が統括してるんですよ」「アジアナンバー2は日本ですよ」ということを唐にアピールするために作った中華思想ではないかというふうに考えられます。また、旧同盟国であった百済については、天皇の膝元において厚遇しているわけです。けれども、「野蛮国である新羅は、本来ならばこのマルの中に入れる国ではないのにもかかわらず、日本の天皇・朝廷は大変人徳のある方なので、追い出すことなく最果ての地ではあるけれど、ここに彼らの集住する場所を提供してあげてるんですよ」と。言うなれば、「新羅という国は、取るに足らない国なんですが、日本の天皇・朝廷は一応彼らにも、慈悲の心を持って対応してるんですよ。」というようなことをPRするための政策だったと私は考えています。両国の民は、本来ならば日本国内に居住できる立場にはないのですが、天皇の徳をもって、かろうじて蝦夷という夷狄の世界に隣接する東国という辺境の地に服属・居住させているという構図を作る必要があったのではないのでしょうか。

この時、高麗郡のみならず新羅郡も一緒につくったらどうかというアイデアも当然あったと思います。あるいは、一緒にできていた可能性があります。しかし、高麗郡をつくって新羅郡をつくらなかったのは、やはり朝鮮にはまだ現実に新羅という国があって、日本国内に新羅という国を再現することに対して、新羅を刺激してはいけないんじゃないかという意見が太政官の中にあっただと思います。そこで新羅郡の建郡は先延ばししたものだと思われれます。高句麗はも

うすでに滅んでおり、政府がありませんので、刺激しません。新羅が日本に新羅郡をつくったことを知って、新羅が本格的に攻めてきたら困るわけです。以上のような結果が、新羅郡の建郡が40年の遅れになっっているんじゃないかと私は考えています。

VIII 新羅琴の名人・^{さらのまぐま}沙良真熊

さて、高麗郡とか新羅郡はどうしてここ武蔵国にできたかという話なんですけども、『続日本紀』延暦8(789)年10月乙酉条が載せる高麗朝臣福信〔和銅元(708)年～延暦8(789)年〕の墓伝には、

其の祖の福德は唐将・^{りせき}李勣が平壤城を抜くに属して、国家に帰して、武蔵に居す、福信は即ち福德の孫なり

とあり、その祖父の福德は、高句麗の滅亡に先立つ天智天皇5(666)年頃に日本に帰化してやってきて、武蔵国入間評(大化5[649]年頃、従来の国造の支配領域は「評」とされた)に移り住んでいたことがうかがわれます。彼がたまたま今の埼玉県に住んでいたのが高麗郡もここにできた可能性が高いと考えられます。もし高麗福德が最初に今の千葉県や茨城県に移り住んでいたなら、そこに高麗郡ができたとは考えます。その高麗郡出身の高麗福信が、ちょうどその時、武蔵国司(今の埼玉県知事)になっていて、その時、新羅郡をどこにつくろうかという話になり、福信は高麗郡もある武蔵国につくったらどうかと申し出て、新羅郡を武蔵国に作った。いずれにしても、蝦夷に近い最果ての地につくことに意味があったと考えます。これについても色々ご意見があるかと思えます。また、これを問題提起として今日・明日と議論ができればと思います。

このように考えますと、天平寶字2(758)年の新羅郡の建郡も、まさにこのタイミングという意味があります。ちょうどこの頃、日本と新羅の関係が最悪になっており、政権の中核にいた藤原仲麻呂が、新羅との戦闘計画、戦争準備を始めていたとも言われています。例えばこんな事件がありました。天平寶字4(760)年

のことですが、こういう事件はあまり知られていないため、今日覚えて帰ってほしいのですが、とても恥ずかしい事件です。天平寶字4(760)年に遣唐副使・大伴古麻呂が唐・長安の蓬萊宮・^{ほうらい}含元殿^{かんげん}における朝賀の儀、すなわち正月の儀式で、新羅とどちらが上席に座るかを争っているという記録が『続日本紀』に残っています。まさしく戦争前夜とも言うまでに緊張していた日本と新羅の外交関係を、その背景に見出すことが可能です。高麗郡と一緒に作れば良かった新羅郡を、新羅と戦争前夜だったこの時期に、和光・朝霞・志木・新座のこの地区に、武蔵国豊島郡の北の一角を割いて作ったのではないかということが考えられます。

つまり、新羅郡の建郡も、高麗郡建郡の際と同じく、藤原仲麻呂政権下の政策として、唐に向けた「日本型中華思想」の誇示を目的としたものであったとみておくことが、妥当ではないでしょうか。武蔵国新羅郡の建郡は、古代東国の「地方史」ではなく、優れて日本古代の東アジア外交史上の問題であったということに他なりません。

さて、今日の午後から新羅琴の演奏がありますが、私も大変楽しみにしております。奈良県で開催された正倉院展に行かれた方いらっしゃいますでしょうか。今年の正倉院展には、新羅琴がちょうど展示されていました。今日のシンポジウムにタイミングを合わせて宮内庁が考えてくださったわけではないと思いますけれども(笑)、久しぶりの展示だったと思います。

新羅琴は今の日本の箏とは異なります。弦の数も違いますし、日本の琴柱という音階を作る部品も新羅の琴にはありません。日本の箏は、山田流・生田流それぞれに象牙の爪をつけて弾きますが、新羅琴は指の腹を使います。新羅のお琴は、現在カヤグムと名前を変えています。もうひとつ違いがありますが、日本の箏は畳の上に置いて演奏しますが、新羅琴は膝の上に置いて演奏します。日本の琴と新羅の琴は、似て非なるものです。埼玉県内の古墳から琴を弾く埴輪が出土していますが、これはみな膝の上に置いて琴



写真3 講演中の宮瀧交二先生

を弾いています。つまり、埴輪に表現されている琴は、日本の箏ではなく、新羅琴につながる朝鮮半島系の楽器であると考えられます。

新羅郡には、琴の名人^{さらのまくま}という人がいたという記録が『文徳天皇実録』に残っています。『文徳天皇実録』嘉祥3（850）年11月己卯条には、

従四位下、治部大輔興世朝臣書主卒す、（中略）、能く和琴を弾き、仍^よつて大歌所別当^{たり}為て、常に節会に供奉^{くぶ}す、新羅人沙良真熊、善く新羅琴を弾く、書主相随^{ふみぬし}つて伝習し、遂に秘道を得る、（後略）

とあり、興世朝臣書主という宮中の大歌所にいた和琴の名人が、新羅人沙良真熊から新羅琴を教わったと記されています。また、『文徳実録』天安2（858）年5月乙亥条にも、

是日宮内卿高枝王薨^{たかえのおうこう}す、（中略）、高枝沙門空海^{しよせき}之書迹を学び、沙良真熊の琴調を習う、未だ其の一道を得ずして、遂に身終わるに至る、時に五十七、（後略）

とあり、この沙良真熊は、書の空海と並び称さ

れる新羅琴の名人であったことがわかります。沙良真熊については、この2つの史料に遡ること70余年前の、『続日本紀』宝亀11（780）年5月甲戌条に

武蔵国新羅郡人沙羅真熊等二人に広岡造の姓を賜う

とも記されていて、武蔵国新羅郡に居住していたことがうかがわれます。

ここで重要な点は、沙良真熊が「広岡」の姓を賜っていることです。沙良真熊と漢字で書いていますが、これは朝鮮風の名前で、広岡造という日本の名前に代えたと出ているわけです。「広岡」は武蔵国の豊島郡の中に広岡郷がありました。新羅郡ができた場所は、武蔵国豊島郡広岡郷だったと思います。沙羅真熊は豊島郡広岡郷に居住していて、天平寶字2（758）年にその一帯が豊島郡から分割されて新たに新羅郡となったので、この時、懐かしい豊島郡広岡郷の地名を姓にしたいと願い出たと考えられます。武蔵国高麗郡が入間郡を分割して誕生したように、武蔵国新羅郡は豊島郡を分割して誕生



写真4 「新羅王居跡」伝説が残る午王山遺跡の空撮

したことが、この史料からうかがえます。

一方で、新たな疑問も生じます。もし仮に、天平寶字2（758）年に沙羅真熊が武蔵国新羅郡に居住していたとすれば、その22年後のこの宝龜11（780）年の時点で、既にかかなりの年齢に達していたと考えられます。正倉院の戸籍研究をしたアメリカ人のファリス氏によると当時の平均寿命を調べた結果、平均寿命は男性32才、女性28才が目安であるとしています。仮に真熊が新羅郡建郡時に20歳だったとしても宝龜11（780）年には40歳過ぎでしょうか。先に掲げた興世朝臣書主と高枝王が亡くなったのが、それぞれ嘉祥3（850）年と天安2（858）年ですので、2人が沙羅真熊に新羅琴を習ったのが果たして生前の何時のことであるかは判然としないものの、高枝王の誕生が802年頃と推定されていますので、高枝王が10歳から真熊に新羅琴を習ったとしても、その時、真熊は、70余歳になります。真熊は、この当時としては余りに長寿すぎるのではないかということです。

今後は、沙羅真熊が新羅郡建郡後に誕生した

人物であった可能性、また、興世朝臣書主と高枝王が新羅琴を教わった沙羅真熊は、初代・沙羅真熊から一子相伝で「秘道」を継承していた2代目・沙羅真熊であった可能性等を検討していく必要があります。いずれにしても、新羅郡には、書で言えば空海と並び称される沙良真熊がいたことは明らかなことです。和光・朝霞・志木・新座から「真熊」と書かれた土器が出てくればいいのですが、午後の発表にはないと思います（笑）。

IX 和光市新倉牛房(王)山の「新羅王居跡」伝説

最後に、今回のシンポジウムは和光市で開催されていますが、和光市には大変興味深い伝説が残っていますので御紹介します。江戸幕府の命を承けて文政11（1828）年に成立した地誌である『新編武蔵風土記稿』巻之百三十三・新座郡之五に収められている上新倉村の項にある、次のような記述です。

古蹟 新羅王居跡 牛房山の上にわづかの平地あり、昔し新羅の王子京より下向の頃、こゝに居住せしと云、【和名鈔】に載する当

郡の郷名志木と云へるは、此辺のことにて志楽木の中略なるべしと、此村にすめる好事の者いへり、当村に山田・上原・大熊など氏とせる農民あり、是は旧き家なるよし、彼等が祖先は京都より新羅王に従ひ来りしなりと云伝ふ、されば此山の名も元此王子居跡より起りたる事なれば、御房山などとかくべきを、いつの頃よりか牛房の字にかへしならんと、是も村老の説なり、(後略)

残念ながら、これまでに実施された牛房(王)山の発掘調査では、こうした伝説を裏付けるような古代の遺構・遺物は発見されていません。しかしながら、民俗学者・柳田国男が「伝説の昔話と同じでない要点としては、第一にそれが我々のいう言語芸術でなく、実質の記憶であったことを挙げなければならぬようである」(柳田国男『口承文芸史考』中央公論社、1947年)と述べているように、具体的な年月日、場所、人名等が不明な「昔話」からの歴史研究は困難である一方で、具体的な年月日、場所、人名を伝える「伝説」は、必ずその中に歴史的事実(史実)を伝えていると思われ、歴史研究の

対象となり得るものです。牛房山伝説もその行間に何を見出すか、これが今日・明日のシンポジウムの課題にもなってきます。先ほど、戸部教育長さんのお話にもありましたように、弥生時代の遺跡牛王山は国史跡を目指していくわけですが、牛房山伝説には、昔話とは違って必ず根拠があると思います。

今後は、従来、歴史学の分野からは等閑視されてきた、この和光市新倉牛房(王)山の「新羅王居跡」伝説を、今一度丹念に検討し、その伝説の中から歴史的事実(史実)を抽出する作業にも力を注いでいくことが重要だと考えます。

まとめにかえて

最後になりますが、古代新羅郡研究の意義を考えてみたいと思います。『続日本紀』天平寶字2(758)年の新羅郡の建郡記事はもとより、前掲の百済・新羅からの渡来人に関する『日本書紀』の記事からも明らかなように、渡来人の中に僧尼が多数存在していたことは見逃せません。「同じ仏教徒である」という信頼感こそ、



写真5 シンポジウムの様子

(2018年11月25日 V部討論質疑応答)

この当時、急速に仏教が浸透していた日本の地域社会に、彼ら渡来人が円滑に融合していった理由の一つではないかと思われまます（鈴木靖民 國學院大学名誉教授の御教示による）。同じアジアにあって、長い交流の歴史を持つ中国や北朝鮮、韓国の人々に対するバッシングやヘイトスピーチが現象する昨今ですが、かつて中国や朝鮮半島諸国から来た渡来人を、地域社会の中にしっかりと受容していった先人の度量を、私たちも歴史から学ぶ必要があるように思います。古代史研究は、単なる「浪漫」の追求ではありません。古代の人々の足跡を解明することから、今を生きる私たちが学ぶことも多いのではないのでしょうか。

今回のシンポジウムでこれからの新羅郡研究が始まるわけでした、ゴールではありません。一昨年の高麗郡建郡 1300 年が新たなスタートをきったように、新羅郡研究もこのシンポジウムをきっかけにスタートして、参加者全員がスタートラインに立つという二日間になればと思っております。今後とも、和光・朝霞・志木・新座市の4市が共同して、この地域の古代史像が解明されていくことを祈念して、まとめにかえさせていただきます。どうも大変長い時間ご清聴ありがとうございました。

みやたき こうじ（大東文化大学文学部教授）

【註】

1. この講演録は、平成 30 年 11 月 24 日に和光市教育委員会主催、朝霞市・志木市・新座市教育委員会、（公財）和光市文化振興公社共催により行われた「特別展 新羅郡の時代を探る シンポジウム」において、宮瀧交二先生（大東文化大学文学部教授）によって行われた講演「武蔵国新羅郡誕生の歴史的背景について」の内容を、当日の録音記録を元に、和光市教育委員会生涯学習課職員の手により活字化したものである。活字の過程において、講演者の講演内容を変えることが無いようにできる限り努めたが、内容の意図に反しない程度に若干の修正・挿図等を加えている。
2. 章の題目は、当日配布したレジュメの題目と一致している。